様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　４月１３日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2006～2008
課題番号：18720099
研究課題名（和文）　ゲルマン語動詞接頭辞とアスペクト・ヴォイスの関係についての共時的・通時的総合研究
研究課題名（英文）　Panchronic investigation on relation of aspect and voice with verbal prefix in Germanic languages

研究代表者
黒田　享　(KURODA SUSUMU)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：00292491

研究成果の概要：

本研究では、英語・ドイツ語・スウェーデン語といった諸ゲルマン語において、接頭辞(Prefix)や小辞(Particle)による動詞派生がどのような文法上の機能を持ち、かつそれが歴史的にどのように変化してきたのかを明らかにした。特に、接頭辞と小辞の間には機能上・歴史的変化上の大きな違いがあることがわかった。また、派生の基底となる動詞が純粋な動詞である場合と、他の品詞からの転換動詞である場合の間にも差異があることがわかった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	500,000	0	500,000
２００７年度	500,000	0	500,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1500,000	150,000	1650,000

研究分野：言語学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：ゲルマン語、通時言語学、動詞接頭辞、語形成、アスペクト、ヴォイス

１．研究開始当初の背景

ゲルマン語においては、接頭辞による動詞派生において、派生元の動詞のアスペクトや項構造が操作されることがある。例えばドイツ語においてはアスペクトに関しては *blühen*（咲いている）→*erblühen*（花開く）の派生のような持続相動詞の完了相化、項構造に関しては *scheinen*（輝く）→*bescheinen*（照らす）の派生のような自動詞の他動詞化などが挙げられる。

このような動詞接頭辞とアスペクト・ヴォイスの関係に関して、諸ゲルマン語間を横断して比較するような研究や通時的な比較を

行う研究はこれまで見られなかった。こうした研究史上の状況がこの研究を着想した背景である。

２．研究の目的

本研究には申請の段階では、三つの目的があった

(1) テキストデータベースに基づいて諸ゲルマン語の、諸歴史段階における動詞接頭辞とアスペクト・ヴォイスの関係を実証的・体系的に捉える

(2) 諸ゲルマン語の歴史において動詞接頭辞とアスペクト・ヴォイスの関係がどう変遷してきたかを明らかにする

(3) 諸ゲルマン語を動詞接頭辞とアスペクト・ヴォイスの関係について各歴史段階別に比較し、共時的・通時的差異、そしてその背景を総合的・多角的に解明する

すなわち、体系性を重視した実証的研究を行うこと（(1)に関して)、ドイツ語や英語といった特定のゲルマン語のみに限らず、視野を他のゲルマン語にも広げること（(2)に関して)、共時的視点と通時的視点を総合した視点から研究を行うこと（(3)に関して）を狙っていたわけである。この目的に沿った研究を実施するため、次項に挙げる方法を採って研究を行った。

３．研究の方法

本研究で採った研究方法は以下のようなものである。

(1)全体的には、研究の中間成果を積極的に国内外で発表し、そこで行った関連分野の他研究者との議論から得られた知見を研究活動に継続的にフィードバックした。これによって、研究成果の信頼性を高めることができた。

(2)研究当初には最新の研究動向を踏まえて論点を整理し、当初の暫定的な研究の方向性を決めた後、小規模なテキストデータベースを構築し、試験的調査を行った。

そしてその結果を解析し、関連分野の他研究者との議論を通じて解析手法の信頼性を検証した後、大規模な調査に取り掛かった。

こうした方法を採ることによって、研究当初から射程の長い研究成果が得られることはなかったが、着実に研究を前進させることができた。

(3)テキストデータベースの構築にあたっては文献学上の最新の知見を応用し、容易に入手できるデータに頼ることを避けた。

現在、インターネットの利用によって簡単に様々なテキストデータベースをダウンロードできるようになっている。しかし、インターネット上にあるテキストデータベースは玉石混交であり、容易に入手できるテキストデータベースを無批判に研究に利用すると研究自体の説得力が低くなる。そこで若干時間はかかるが、特に重点的に調査を行った領域についてはテキスト校訂の質についても充分に検討し、質の高いテキストのみを調査対象とすることにした。

また、解析においてはコンピュータによるデータ解析を行い、大規模なデータを高速に処理した。

(4)国内では取り組む研究者の数に限りがあるテーマであるので、成果の発表は海外を重視した。

国内における言語研究の水準は国際的に見ても高いが、ゲルマン語史研究については従事する研究者の数が欧州諸国よりもはるかに少ないのが現状である。そのため多くの研究者が議論を戦わせる場である欧州学界で中間成果を発表し、そこでの議論から得られる知見を研究にフィードバックすることによって研究の水準をより高めることができた。

４．研究成果

本研究によって、以下のようなことが明らかになった。

(1)諸ゲルマン語において、接頭辞(Prefix)や小辞(Particle)による動詞派生が持つ文法上機能の類型が体系化できた。

今回は主としてアスペクト・ヴォイス操作機能について調査を行ったが、それ以外の、もっぱら語彙的意味の操作に関する機能との関連も含めた体系化も視野に入れることができた。さらにこの体系が経てきた歴史的変遷過程の輪郭も突き止めることができた。これについてはさらに大規模なコーパスを投入する研究を行うことによってより精度の高い議論を重ねていくことも可能である。

(2)歴史的変化の観点から特に目を引くのは、小辞動詞においてはかつてのゲルマン語の方が現代語よりも項構造変換機能が明らかに発達していたことである。

現代語に関する議論の中では、項構造変換は小辞動詞の派生においては原則的に行われず、基本的には接頭辞動詞の派生の場合に限るという考え方が長く支持されて来た。この考え方はこれまでゲルマン語の古い段階についてもあてはまるものと考えられて来たが、実際にコーパスを調査して得られた結果はこの考え方を補強せず、動詞派生と項構造変換の関係についての理論的枠組みの再考を迫るものである。もっとも、小辞動詞派生における項構造変換は位置に関連する動詞の場合のみに観察される現象であり、限定的な機能であるとも言え、さらに調査が必要であるだろう。

(3)動詞以外の品詞から転換された動詞の場合、派生の基盤となる動詞が存在しないケースもある。こうした動詞については派生前の段階と派生後の段階を比較対照することができないため、本研究の枠組みにおいては原則として研究対象とすることができない。

ただ、そのようなケースにおいても派生動詞自体は動詞範疇に属する要素であると言えるし、そのアスペクトやヴォイスに関わる振る舞いは多くの点で通常の派生によって形成された小辞・接頭辞動詞に似ている。その意味でこうした転換動詞の形成も通常の動詞派生の延長線上に捉えるべきであると言えるだろう。

しかしその一方で、転換動詞における小辞・接頭辞の振る舞いには通常の動詞派生において見られるそれとは異なる点も観察できる。これについては今後より詳しい調査が必要である。

(4)文法記述以外の面でも、コーパスに基づく言語研究の手法に関して多くのノウハウを蓄積することができた。

本研究を通して、小規模のコーパスからは採取できる用例の数に限りがあり、高い説得力を持つ議論ができないことが明らかになった。従来は言語研究的に野心的なテーゼが数少ないデータを基に提唱されることが多く見られたが、そうしたアプローチに対して一定のブレーキが必要であることが突き止められた。

しかし一方で、あまりにコーパスが巨大すぎるとその調査に時間がかかりすぎ、ある程度のところで折り合いをつけざるを得ない。この問題については充分に客観的な根拠に基づく検証がされているわけではないし、調査する対象によっても充分とみなしうるコーパスの規模が変わって来るが、学界において広く妥当と判断されるコーパスの規模について明らかにすることもできた。

(5)また、古語の研究においてはヴォイスについては充分に説得力ある議論が可能であるが、アスペクトについてはそれが極めて困難であることも判明した。

もはやネイティブスピーカーの存在しない古語で書かれたテキストであっても、ある程度は各センテンスにおける名詞同士の意味役割関係が明らかにできるので、充分に説得力がある形で動詞派生における項構造の変化を突き止めることは可能である。しかし個々のセンテンスのアスペクト的性質は基本的に観察者の解釈に従って捉えざるを得ず、客観性が著しく低下する。

アスペクトに関連する副詞や接続詞との共起関係によってセンテンスのアスペクト上の性質を捉えることは不可能ではない。ただし、実際にコーパス調査を行ってみると、そうした要素が共起している用例はごくわずかであり、研究の足がかりとしては現実的ではない。そのため、ゲルマン語史研究においてアスペクトを取り上げる場合は慎重さが求められると考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2　件）

1. Kuroda, Susumu: „Zur semantischen Funktion der *werdhan wordhan*-Konstruktion“. 「エネルゲイア」 査読有 33 巻 2008 年 p. 45-57.

2. Kuroda, Susumu: „Valenzmodifizierende Funktion der Präfixe im Althochdeutschen und Gegenwartsdeutschen“. *Sprachwissenschaft* 査読有 32 巻 2007 年 pp. 29-75.

〔学会発表〕（計 3　件）

1. Kuroda, Susumu: „‚Inkorporation‘ im Althochdeutschen“. 研究集会„Historische Textgrammatik und historische Syntax des Deutschen“ 2008 年 5 月 8 日 Graz 大学（オーストリア連邦共和国）

2. Kuroda, Susumu: „Zur textlinguistischen Funktion der *warth wordhan*-Konstruktion“. 研究集会 „Wort Satz Text“ 2008 年 4 月 26 日 Poznan 大学（ポーランド共和国）

3. Kuroda, Susumu: „‚Aspekt‘ und ‚Aktionsart‘: Beobachtungen am Deutschen, Russischen, Englischen, Finnischen und Japanischen“. 研究集会 Humboldt-Kolleg Rikkyo. 2006 年 8 月 10 日 立教大学

〔図書〕（計 5 件）

1. Kuroda, Susumu, Ziegler, Arne 他：*Historische Textgrammatik und historische Syntax.* (仮題) (刊行決定済)

2. Kuroda, Susumu, Mikołajczyk, Beata 他: *Wort — Satz — Text.* (仮題) (刊行決定済)

3. Kuroda, Susumu, Mikołajczyk, Beata, Kotin, Michail 他 34 名(13 番目掲載). Peter Lang Verlag. *Terra grammatica.* 2008 年 483 頁 p. 195-207 担当

4. Kuroda, Susumu: Szurawitzki, Michael, Schmidt, Christopher 他 21 名(4 番目掲載). Koenigshausen & Neumann. *Interdisziplinäre Germanistik im Schnittpunkt der Kulturen* 2008 年 404 頁 p. 55-67 担当

5. Kuroda, Susumu, Schmidt, Gabriela 他 5 名(1 番目掲載). 日本独文学会. *Aspekte der deutschen Standardsprache.* 2007 年 70 頁 p. 1-10 担当

６．研究組織

(1)研究代表者
黒田　享　(KURODA SUSUMU)
筑波大学　大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：00292491